

上映映画解説

1953, 4.18~5.5

国立近代美術館 フィルム ライブラリー



No. 5

まんがえいが

フィルム・ライブラリーについて

国立近代美術館では、設立以来同館内に定員約百名の映写室をもつ、フィルム・ライブラリーを設け、内外古今の優秀映画の収集保存ならびにその活用について努力いたしております。
今回は、日米英ソ四か国の漫画映画特集として、次の映画を毎日上映いたします。

すて猫トラちゃん

東宝教育映画作品
演出 政岡憲三
脚色 佐々木 富美男
作詞 佐伯 孝男
作曲指揮 服部 正
作画 撮影 日本漫画社技術部

すて猫のトラちゃんが三毛ちゃん一家に助けられ、家族の一員として楽しく暮すまでの物語。

この映画は多くの漫画映画のように、哄笑を起させるギャグやスピーディーな点はありますが、適度のユーモアとメロソスをもち、ふつくらとした情趣がふれている点に特色があります。

製作者は児童のための映画として、美と愛情の表現に努力したといっていますが、柔く楽しい雰囲気を出すことに成功し、大人にも楽しめる漫画映画です。
(二巻)

セロ弾きのゴーシュ

日本映画社製作
演出 田中喜次
撮影 小野一郎
音楽 鈴木喜代治
セロ独奏 鈴木 聡

宮城賢次の名作を影絵映画として製作したもので、原作のもつ味わいを影絵の技法で表現し、また音楽もただ伴奏音楽としてではなく、この映画の重要な要素として取り入れた点なかなか要を得ており、影絵音楽映画として優れた作品です。子供ばかりでなく大人も充分楽しめます。(二巻)

小人とおお虫

東宝教育映画株式会社 共同作品
日本映画株式会社
製作 山本 早苗
演出 古沢 秀雄
撮影 東理 仁朗
音楽 坂本 良隆

青虫を救った情深い小人が、やがて春になって美しい蝶となつた青虫の助けにより、乗物行列のコンタールに一等を占め、小人の王様になる話ですが、画面も美しく、小人の表情や動作にも面白味が汲みとれます。物語りの展開にも無理がありません。(二巻)

くもの糸

三幸映画株式会社製作

これは有名な芥川龍之介の原作から取材した影絵映画で、漫画映画とは又違った影絵独特のテクニクを使い、内容の味わいを巧みに表現しています。(一巻)

テムズ河 The Thames

英国 B・B・アニメーション会社
製作 デイヴィッド・D・ハンド
監督 パット・グリフィン

「白雪姫」「バンビ」製作にデイヴィッドの許で総監督に当つたデイヴィッド・D・ハンドが、一九四七年アール・ラングに招かれて渡英して作つた「ミュージカル・スイート・ボックス」シリーズ(先に当フィルム・ライブラリーでとり上げた「スコットランド」「ロンドン」等)の一つで、テムズ河沿岸の風光を漫画風の調子で水彩画で描いた色彩映画です。

色彩は柔らかい緑が主としてよく整っていますので画面が明るく気品があり、舟の上からの流れを下る移動の感じを巧みに出しています。
又マーロー、ヘンリー等レガッタで有名な場所や、ウェストミンスター・アベイ、ロンドン塔など歴史的に有名な所が、郷土色の豊かな歌曲につれて次々と紹介されています。(色彩、一巻)

灰色くびの野がも

製作 ソ連漫画映画撮影所
演出 エリ・アマリク
脚本 ヴェ・ボルコヴニコフ
美術 ゲー・ベリョースコ
作曲 アー・トルーソフ
撮影 ユー・ニコリスキー
メイ・ヴォイノフ

灰色のくびをした仔がもが、いじわるのきつねに羽をむしられて飛べなくなり、母がもたちが南の国へとびさつた後、灰色くびだけはさびしくたりのこさまになりました。そこへまたきつねがあらわれましたが、兎の一家にたすけられ、やがて春がきて、灰色くびは母がもたちとめぐりあうという話です。

編集にむだがなく、動物類の生態がよく表現されているので、たのしく見ることが出来ます。(色彩、二巻一九四八年)

ポパイの子供教育(色彩、一巻)

パラマウント作品

ポパイは、ベティ・ブーブと共に、ブライシャール兄弟の漫画映画における二大スターである。そもその誕生はシーガラの連載漫画であるが、フィルムの上姿を現したのは、一九三三年の「舟乗りポパイ」が最初であつた。以来二十年間に生れたポパイ映画がどのくらいの数に上るか知らないが、終始一貫して変わらないのは、ブルートというおよそ無頼で横紙裁りの悪徳に悩まされながら、ほうれん草の罐詰から得る怪力で見事彼を打負かし、オリヴァー・オイルという世話女房型の恋人に祝福を受けるということである。その趣向は手を変え、品を変えても、二十年一日の如く変りはない。この基本的な渾身を以てして今なおおきられないのは、あの「ポパイ・ザ・セイラーマン」と歌うダミ声と共に、とはしり出る風格の面白さで、漫画王デイヴィッドが、ドナルド・ダックやミッキー・マウスなどの動物の表現に縦横の才腕を見せるのに引きかえ、人物の描写はどちらかと言えば不得意なのに較べ、ポパイやベティ・ブーブのような人物の創造に成功したブライシャールの功績は見逃せない。(フィルム・ライブラリー運営委員 清水晶)

漫画映画の出来るまで

製作 日映科学映画製作所

製出 中村麟子

演出 衣笠十四三

撮影 広木正幹

この映画は漫画映画の原理と製作過程のあらましを平易に説明した映画で、一枚一枚丁寧に描いた絵を連続的に見ると動いたように見えることや、漫画映画の「コマ」コマは手で描いた絵を撮影したものであることや、又音楽のテンポと画面の動作とを合致させるために正確な計算のもとに綿密な仕事を行つてゐることなどを知ることができます。(一巻)

漫画映画の歩み

「動く絵画による映画の世界は動く写真」によるそれをならんで、特殊ではあるがきわめて意義深いものをもつてゐる。

映画の前身も、初期に多かつたトリック映画も、その本質は漫画映画の具体化は、一九〇七年を待たなければならなかつた。それはアメリカのスタンブート・ブラケットンによるといわれる。その後、世界各国が漫画映画を手がけ、しばしばすぐれた作品をも生みだしている(たとえば一九二八年ドイツで作られた、影絵による「アクメッド王子の冒険」が、結局漫画映画の繁栄の歩みは、その母国アメリカを中心として進められることとなつた。

そこにはまず、漫画と実写を結合した「インクびんから」のシリーズ(フライシャー兄弟、かれらは後に「ベティ・ブーブ」や「ポパイ」を作つてゐる)があり、さらにいろいろな動物を主人公とする数多くのシリーズ(たとえばサリバンの「ホコのフェリックス」)があつた。

動物漫画の作者の中からめざましい進出をとげたのがウォルト・ディズニーである。かれは「誇張と強調によつて物体・動物・人間の本质を啓発する」ことに全力をあげ、音楽と色彩の創造的処理にみごとな成功をおさめて、「ミッキー・マウス」(後にブルート、グーフィー、ドナルドなども登場)や「シリ・シンフォニー」が、漫画映画とほとんど同義語視されるほどの事態を作りだした。かれはさらに「人物や動物たちに說話の

世界をくりひろげさせる」かねての念願を、「白雪姫」その他の長篇漫画の連作によつて実現しつゝある。

漫画映画の最大の源泉地は今日もなおアメリカであるが、一時不振だつた各国の関心がだいに強く復活しかけてゐることは見のがすべきでない。特に注目されるのはアメリカものときわだつた対照を示す、数かずのソ連の教訓漫画である。そうした中で、日本の漫画映画が、各種の事情からなお活発な歩みを見せていないことは、まことに残念といわなければならない。(フィルム・ライブラリー運営委員―関野嘉雄)

漫画映画と今日の絵画

漫画映画は、一秒コマとして30分のフィルムには四万二千二百枚の絵が撮影されるわけで、それだけの絵が作家たちの手で分業的に描かれてゐるのである。額縁の絵を眺めてこれがかもし動きだしたなら、という空想が一応実現したことになる。もちろん油絵のような筆触の複雑な絵をそのまま動かすことは実際には困難で、線画を主とした登場人物を背景の絵の前で動かすというのが今までの大体のやり方である。しかしディッソンの動かし方ばかりでなく、色彩も微妙な情緒や心理を表現するようになり、とくにその幻想、ユーモア、諷刺の奇想天外な駆使は、今日のシュルレアリズム絵画と同時代芸術として共感するものが大いにある。超現実派の画家サルヴァドール・ダリが戦後ディズニーの撮影所で試作したとつたえられたが、その実現は大衆性の如何にかかつてゐるといつてよい。その点でこれまでの漫画映画は最も大衆的な童話絵本とコミックストリップス(連載漫画)の二つの様式を發展させたもので、殊にディズニーやフライシャーなどのアメリカ物が優位を始めてきた。それで漫画映画といへば画風までが一定した印象をあたえてゐるが、世界各国によつていろいろな作風があり、また映画の目的・取材によつては、現代のさまざまな絵画様式(形や色彩感覚)と面白く結びつく可能性が無限にあるわけである。いわゆる漫画映画をひろく「動画」と考えれば、フィッシャーやレン・ライなどの抽象映画をもつと發展させたものや、さらに立体映画による展開など、映画の大きな開拓地があり、造形芸術と漫画映画との関係は計り知れぬ未来性をもつといえる。

(フィルムライブラリー運営委員―滝口修造)